

文科系学部の学生だった頃、専攻の哲学やラテン語の授業と共に、最も好んだ授業に美術史があった。西洋中世からルネサンスの美術の歴史について、多くのことを学ん

見創見 Tuesday

「死を忘れるな」という意味だ。ペストによる人口減少を経験し、キリスト教的な死生観の中に生きた中世ヨーロッパの人々にとって、死は毎日の生活の中にある身近なものだった。いつ訪れるかわからない死を忘れずに日々を生き、芸術を創り出す。文化の根底に生と死の概念が生きていた時代だった。

一方、栄華を誇った大英帝国が衰退したのは、「子供に人の死を見せなくなったからだ」と言った人がいる。子供にとって、生きることの意味を知る貴重な機会が、看取りの場面であることを示唆している。その機会を失った社会では、生きる力を学ぶ機会も少ないのかもしれない。

以前、滋賀県に勤務してい

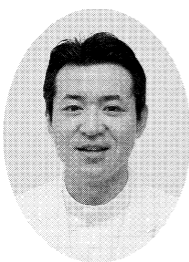
「生」を知る貴重な機会だ

た。その近くにある診療所で、子供が曾祖母を看取った場面を写真に撮り、絵本として出版した人がいる。写真家の國森康弘さんだ。その國森さんと昨年、講演で一緒にしていたたく機会があった。

自分を大切に育ててくれた曾祖母が、徐々に年老いて弱っていく。厳かに命が消えていく様子を看取り、涙の後、笑顔で生に向き合う姿をやさしいまなざしで捉えている。絵本は決して否定的な印象を

小倉 和也

はちのへファミリー
クリニック院長



おぐら・かずなり
1972年生まれ。2010年に国内でも珍しい家庭医療の医院を八戸市で開業。国際基督教大、琉球大医学部卒。八戸市出身。

ごく自然のことのように思われた。

学校でのいじめや青少年の悲惨な事件が起こると、命の大切さを学ばせる必要がある、という声が聞かれる。その度に思うのは、現代の都市部で生活する中で、本当に命の大切さを実感できる機会が、子供に与えられているのだろうか、ということだ。

同じような情景を、滋賀県での訪問診療で何度も目にしていた。昔ながらの小さな町では、先祖代々の土地に3世代、4世代が同居し、家族で曾祖母を看取ることが当たり前だった。地元にゆかりの万葉集の時代から、世代から世代へ命が引き継がれる営みが、医療が介入するずっと以前から、千年以上に渡って続けられてきた。家庭医としても、一族が集まる場で看取りを行い、お孫さんやひ孫さんをその後も診続けることが、

3年生の頃、曾祖父の死に立ち会った。一族が集まり、自宅の畳の上で徐々にその時が近づく姿を見守る。家族に見守られて逝く姿は、生の延長であり、家族の生活の中にあるものであると感じた。

病気になるったり、高齢で弱ったりした人は病院へ行き、子供はもちろん成人の家族も長く一緒にいることが難しくなる。生死に関わる状態になれば、子供と一緒にいられる時間はもっと限られる。気がつく大切な人がいなくなっている。その過程で命の大切さを実感できる機会は、極めて少ないのではないか。

10月4日の市民フォーラムでは、滋賀県でお世話になった緩和ケア医の細井順先生が講演される。終末期の在り方や医師としての関わり方について、ご教示いただけることを楽しみにしている。

「死」を実感すること

だ。

そのほとんどを忘れてしまったが、鮮明に覚えている言葉がある。この時代の絵にしばしば書き込まれた「Memoriam」。

ラテン語で「死を